下部尿路機能障害を有する患者への排尿ケアチーム介入の有用性
～急性期病棟と回復期リハビリテーション病棟の比較～

町田恵理子[1)] 木村理美[1)] 杉戸和子[1)] 見田野直子[1)] 峰岸早希子[1)]
髙橋陽子[1)] 藤田真介[2)] 亀井浩由[3)] 江熊広海[4)] 美原盤[4)]
1) 脳血管研究所美原記念病院 看護部　2) 同 リハビリテーション科
3) 同 医事課 4)同 医師

[目的]当院は脳神経疾患の専門病院であり、病棟看護師とともに排尿ケアチームが下部尿路機能障害(LUTS)を有する患者に対して包括的排尿ケアを実施している。今回、排尿ケアチームの有用性について急性期病棟と回復期リハビリ病棟で比較検討した。

[方法]急性期病棟(45 床、平均在院日数 9.2±0.5 日)および回復期リハビリ病棟(99 床、平均在院日数 46.4±3.4 日)において、平成 28 年 7 月～12 月の 6 ヶ月間の尿道留置カテーテル(カテーテル)挿入した件数、絶対的適応件数、相対的適応件数、排尿ケアチーム介入件数、LUTS 症状、介入期間、介入後症状改善件数を調査した。尚、データー収集に際しては匿名性を保ち本研究以外に使用しないこととし配慮した.

[結果]急性期病棟、回復期リハビリ病棟のカテーテル挿入件数は、222 件、47 件、絶対的適応件数は、70 件、10 件、相対的適応件数は、152 件、37 件、排尿ケアチーム介入件数は 14 件、23 件、LUTS 症状として最も多かったのは、それぞれ「排出障害」、「蓄尿障害」だった。介入期間は 4.5±4.5 日、8.8±7.8 日、介入後症状改善件数は 11 件、20 件であった。

[考察]相対的適応患者の排尿ケアチームの介入割合は急性期病棟 16%、回復期リハビリ病棟 95%であった。脳神経疾患患者は LUTS を呈することが多く、回復期においても継続的な介入が必要である。回復期リハビリ病棟においても排尿自立指導料算定の対象となることが望まれる。